

ゲオルク・ビュヒマン『翼のある言葉』の編集史 (1)

佐伯 啓

はじめに

ゲオルク・ビュヒマン (Georg Büchmann 1822-1884) の『翼のある言葉』 („Geflügelte Worte“)¹⁾ は、1864年の出版以来、ドイツではもっともポピュラーな引用句辞典として知られている。ただし辞典といっても、見出し語と解説が単純にアルファベット順に並べられたものではない。ふつうの辞典とは体裁が異なり、ドイツを中心にヨーロッパ各国の文学作品、歴史、神話、童話、聖書、政治家の言葉、あるいは映画や歌のタイトルなどからドイツ人によく知られた言葉、いわゆる「人口に膾炙した」言葉だけを収録し、その出典と短い解説を記した、読み物風の辞典である。収録されている原文も複数の言語を網羅しており、初版の場合でいえばドイツ語、英語、フランス語、イタリア語、古典ギリシャ語、ラテン語と6カ国語に及ぶ。当時の大ベストセラーであったこの本の編集は、1884年のビュヒマン没後は他の編集者へと引き継がれ、現在もなお版を重ねている。初版の、220ページの控えめな体裁からは想像できないほど見た目も大きく変わり、引用句辞典としての機能がより前面に押し出されて、今では600ページを越えるボリュームのある書物となっている。最新版は2001年に出た第43版である²⁾。

辞典として見ると、この本はどのような時に役立つだろうか。第一には、人々の間でよく知られた言葉の正確な典拠を調べたい場合である。郵政民営化法案が参議院で否決されて衆議院を解散した日の会見で、ガリレオ・ガリレイと自分の姿とを重ね合わせ小泉首相が引用した「それでも地球は動く」という言葉は、ドイツ語でも „Und sie bewegt sich doch!“ というフレーズで知られているが、これを『ビュヒマン』で調べて見ると、実際にはこれはガリレイの言葉ではなく (ちなみに日本では姓の「ガリレイ」よりも「ガリレオ」のほうが多く使われるのも興味深い) 18世紀の創作であろうということが、根拠とともに記されている³⁾。また、ドイツの新聞やコミックなどを読んでみると、その文化圏の人間にしかわからないような、あるいはそれを知っていることが暗黙の前提となっているようなパロディやジョークがたくさん出てくるが (図1参照)、それらの出典やオリジナルの原文を調べたいときも、この辞典はたいへん重宝する。



図1. シラー『ピッコロミーニ父子』冒頭のセリフを引用したパロディ⁴⁾。

このように、ドイツ人のみならずわれわれ外国のゲルマニストにとってもたいへん便利な本なのだが、ビュヒマンやこの辞典そのものを学問の対象として本格的に扱った研究は、不思議なことに本国ドイツにおいてもほとんど見られない⁵⁾。ビュヒマンと同時代に、辞書編纂の分野で大きな業績を残したザンダース (Daniel Sanders 1819-1897) やヴァンダー (Karl Friedrich Wilhelm Wander 1803-1879) といった人物についてはすでに本格的な研究がなされている一方で、ビュヒマン研究に関してはきわめて貧しい状況と言わざるをえない。

この論文では、ビュヒマンの1次資料を基に『翼のある言葉』というタイトルの由来とその概念自体について、編集史という視点から考察を加えてみたいと思う。ビュヒマン自身の証言や1次資料の記述を読み解くことで、ビュヒマン研究の必要性が明らかになるだけでなく、ビュヒマン研究にとって編集史的視点はなぜ重要なのか、編集史から見えてくるものは何なのか、という問いへの答えも自ずと見えてくるのではないかと思う。

考察手順としては、まず1章でこの書物の成立と編集者の歴史について概観する。次に2章では、『翼のある言葉』というタイトルの由来について、ビュヒマン自身の記述に基づいて考察する。そして3章では、ビュヒマンによる校訂作業の実際を示すために、“Geflügelte Worte” という概念自身を例として、各版における記述を比較しながら論じていきたい。

1. この書物の成立と編集者の歴史

ビュヒマンの『翼のある言葉』に関する専門的研究が、その知名度のわりにはきわめて少ないという事実についてはすでに指摘したが、その理由はおそらく次の2つであろう。ひとつは、この書物は学術書ではないので研究には値しない、という判断である。確かにこの本は文学・歴史物知り辞典といった体裁なので、とてもトリヴィアールな印象を受ける。研究対象として取り上げるほどの価値がないという判断にも、ある程度納得できる部分がある。戦後に発行された版、特にホフマン(Winfried Hofmann 1931-)が編集責任者となってからの最近の版だけを見ると、改訂作業もほとんど行われておらず、数年ごとにルーティーン増刷が行なわれているだけである(2001年の42版で、久しぶりにやや大きな改訂がなされた)。

2つ目の理由として、歴史的人物としてのビュヒマンへの学術的関心が、時の経過とともにドイツでは薄れていることも否定できないだろう。ドイツの伝記事典のスタンダードであるADB(Allgemeine Deutsche Biographie)とNDB(Neue Deutsche Biographie)のビュヒマンに関する記載内容を比較してみると、それは一目瞭然である。ビュヒマンの説明に割かれている分量は、ADB(1903年)における詳細な記述⁶⁾に比べ、NDB(1955年)では約10分の1にまで減少している⁷⁾。

ところでビュヒマン研究の成果の貧しさは、上述した2つの一般的な理由以外に、もうひとつあるような気がする。それは、ビュヒマンの1次資料、特に最も重要な最初期の版の入手が思いのほか困難だという点である。「一家に1冊」の„Hausbuch“と見なされていたこと、そのためかなりの部数が世に出ていたことに加え、特に著作権が切れた1914年以後はさまざまな普及版が次々と公刊されたこともあり、ビュヒマンの『翼のある言葉』といえ、あまりに通俗的な書物としてどの版も内容は似たりよったりだと認識されてきたのではないだろうか。私は引用論およびレトリック研究のつながりからビュヒマンに関心を持ち、ビュヒマンと『翼のある言葉』について調べ始めたのだが、これだけポピュラーな出版物であるにもかかわらず、あるいはポピュラーであるがゆえに、百科事典や文学事典、あるいは数は少ないとはいえ公にされているいくつかのビュヒマンに関する論稿の典拠を調べてみると、たいいていの場合、1次資料となっているのは後の時代の版であることがわかった。ビュヒマンを扱った論稿の中、初版を直接手にして書いていると思えるものは、私の知るかぎりフリーユヴァルト(Wolfgang Frühwald)とヘス(Günter Hess)の論稿2つのみである。前者⁸⁾は19世紀の教養市民層における文学的引用の社会的機能という観点からビュヒマンを論じたもので

あり、後者⁹⁾は歴史的・文学的資料としてビュヒマンを扱うことで、イデオロギーとしてのドイツ教養主義を解き明かそうとする研究である。どちらも内容的にたいへん興味深い論文で、特にヘスがミュラー＝ザイデル (Walter Müller-Seidel) の退官記念論集の中で公けにしたビュヒマン研究プロジェクトは、1次資料として1864年から1993年までの間に出版された『翼のある言葉』を25冊集めるところから出発しており、われわれの方向性ともっとも近いものになるはずであった。だが結局このプロジェクトは、1997年に発表されたこの論文以後は継続されなかったようだ¹⁰⁾。そのようなわけで、ビュヒマンと『翼のある言葉』に関しては、新しい発見がなかなか見あたらないのである。

このような事情から、私は10年ほど前からビュヒマンに関わる1次文献の収集に自ら着手した。有名な本なのですぐに初期の版も手に入るだろうと思っていたのだが、これだけ出版部数が多いにもかかわらず、古い版の収集作業は思いのほか難航した。ドイツ、日本およびアメリカの大学図書館を皮切りに、ドイツ各地の公立図書館のビュヒマン所蔵状況も調査して、コピーやマイクロフィルムの形で少しずつ手に入れたのだが、距離の事情に加え、ビュヒマンの1次文献を体系的に所蔵している図書館は本国ドイツでも皆無で、収集作業は思うようにはかどらなかった。

そうこうするうちにドイツの古書店のネットワーク化が急速に進み、旧東ドイツの古書なども市場に出てきたようで、これまではドイツの大学図書館経由でも入手が困難だった多くの古書、ビュヒマンの場合でいえば、特に彼自身が編集に携わった初期の版を入手できる可能性が飛躍的に高まった。その後2001年から2002年にかけてドイツに研究滞在する機会を得た際には、『翼のある言葉』の原本収集に加え、ビュヒマンの手紙、さらには文学雑誌に出たこの本についての書評記事（特にビュヒマンが編集に携わっていた時期のもの）を中心に調査した。

こうして10年ほどの収集作業の末、研究上それほど重要ではない2つの版(34.Aufl.と42.Aufl.)¹¹⁾を除けば、現時点においてビュヒマンの1次資料のほとんどを入手することができた。そしてそれらを丹念に読み進めるうちに、特に初期の版の前書きや本文には、これまで看過されてきた重要な証言や記述が少なからず含まれていることに気づいた。どこにでもある本であるがゆえに、初期の版における改訂作業の実際や版ごとの微細な差異については、ほとんど注目されることがなかったのだと思われる。

だが、実はこの本にも長い編集の歴史がある。初版が出た1864年から現在までの約140年の間に、内容的に大きな変化が見られるのである。ビュヒマンが自分で編集作業を行っていた初期の版では、ほぼ毎年のペースで改

訂と増刷がなされていたし、ビュヒマン没後、この書物の編集を引き継いだロベルト＝トルノウ (Walter Robert-tornow 1852-1895)、ヴァイトリング (Konrad Weidling 1861-1911)、イッペル (Eduard Ippel 1849-1915)、クリーガー (Bogdan Krieger 1863-1931) といった編集者たちは、いずれもビュヒマンの仕事に倣い、精力的な改定作業を継承した。

では、この本はどのようにして生まれたのだろうか。『翼のある言葉』出版の経緯について述べる前に、ビュヒマンの経歴を簡単に紹介しておこう。ゲオルク・ビュヒマンは、1822年にベルリンで生まれた。ベルリン大学で神学、古典文献学、そして考古学を学び、1845年にエルランゲンで博士の学位を得る。歴史言語学をテーマとした内容であったようだ。その後ブランデンブルクで教師をしたあと、1854年から1877年までの23年間にわたり、ベルリンの職業学校で外国語教師をつとめる。外国語の能力に長け読書家であったビュヒマンが1864年に出版した『翼のある言葉』は発刊とともに予想以上の売れ行きを示し、彼は一躍時の人となった。『翼のある言葉』の仕事が認められ、1872年にはプロフェッサーのタイトルを、さらに1877年にはプロイセン王から赤鷲勲章を受けている¹²⁾。

『翼のある言葉』の出版は、1863年と1864年にビュヒマンが行なった2つの講演が基になっている¹³⁾。最初の、1863年にベルリン近代語協会で行なされた講演は「間違った引用句」に関するもので、会話の中に文学作品からの一節をうろ覚えで引用する場合の間違いを、オリジナルの原文に基づいて指摘する内容であったらしい。また、翌年にベルリン王立劇場で行なわれた講演は、「人口に膾炙した引用句」に関するものであった¹⁴⁾。そして1864年のこの講演内容がその年のうちに1冊の本にまとめられ、ハオデ&シュペナー (Haude&Spener) 社から出版されることになる。

ハオデ&シュペナー社が創業300年を記念して1914年に出版した社史をたまたま見つけたのでさっそく目を通して見たところ、この会社の出版物中過去最大のベストセラーとなった『翼のある言葉』出版の経緯が記されている箇所を発見した。その記録によると、1864年のビュヒマンの講演を聴いた社主のフリードリヒ・ヴァイトリング (Friedrich Weidling 1821-1902) が、講演内容を書物として出版することをビュヒマンに持ちかけたいらしい。その際、ビュヒマンを説得することがいかんたいへんだったかが次のように記されている。

出版社としての最初の成功は、1864年、当時の社主フリードリヒ・ヴァイトリングによってもたらされた。実業学校の教師だったゲオルク・ビュヒマン博士がベルリン王立劇場のホールで行なった「人

口に膾炙した引用句」という講演に居合わせたヴァイトリングは、
ビュヒマンに対し、講演の内容を本の形にまとめ直し、自分の出版
社から世に出すことを強く薦めた。ためらうビュヒマンを説き伏せ
て出版の承諾を取りつけることがどれほど困難で、どれほどの説得
技術を駆使せねばならなかったかを、後にヴァイトリングは熱く
語ったものである¹⁵⁾。

この記録を読むかぎり、講演を本にして出版することに、最初はビュヒマンもそれほど積極的ではなかったようだ。出版をためらった理由は定かではないが、ビュヒマンの本業は実業学校の外国語教師であったので、執筆作業を負担に感じたのかもしれない。だが、執筆のための資料はすでに十分手元にあったのであろう。彼の本は、同年中に『翼のある言葉』というタイトルでハオデ&シュベナー社から出版され、発売後数ヶ月で再版されるほどの売れ行きを示す。その成功は、出版を働きかけたヴァイトリングの思惑をもはるかに越えるものであった。

ビュヒマンのこの書が、出版物としてそれほどの成功を収めた秘密はどこにあったのだろうか。当時の時代背景として、教養市民層の勃興にとまなう知的風潮が大きく作用したであろうことは指摘するまでもないが、もうひとつ、ビュヒマンが各版の前書きで行なった読者への呼びかけもまた、その成功にきわめて大きな役割を果たしたと思われる。すなわちビュヒマンは、収録すべき引用句の提案や間違いの訂正を手紙で知らせてくれるよう、読者に対して常に呼びかけ続けた¹⁶⁾。ビュヒマンの呼びかけに対する反響は大きく、文学的素養のあるドイツ中の教養層が自発的に引用句の収集とそのルーツ探求に協力した。これら読者たちからの大きな助力に対し、ビュヒマンは後に「600人の文通者」という1879年に発表した論文で、彼らの惜しみない協力に対し、心からの感謝の意を伝えている¹⁷⁾。

次章の考察の準備として、あらかじめ『翼のある言葉』の編集史を概観しておこう。以下の表は、通常 „der große Büchmann“ (大ビュヒマン) と呼ばれる決定版の校訂史年表である。『翼のある言葉』の出版史は、概ね4つの時期に分けることができるだろう。すなわち、1864-1882の第一期(ビュヒマン生存中に出版された初版から13版)、1884-1925の第二期(ビュヒマン没後の版で、後の編集者たちによって精力的な改訂が行なわれた14版から27版)、1937-1942の第三期(ヒトラーのプロパガンダ用に改ざんされたナチ版で、28版と29版)、そして1961以後の第四期(戦後に出された30版から43版)である¹⁸⁾。さしあたってわれわれが対象とするのはビュヒマン自身の証言や編集作業の実際を知ることのできる第一期(初版から13版ま

で) だが、14 版以降の版に付された前書きもまた、ビュヒマンの編集方針や „Geflügelte Worte“ という概念の定義に関する重要な記述を多く含み、きわめて貴重な資料であることだけ記しておきたい¹⁹⁾。

『大ビュヒマン』 („der große Büchmann“) 校訂史年表

出版年	版	総ページ数	編者
第一期 -----			
1864	1.Aufl.	220S.	Büchmann, Georg (1822-1884)
1865	2.Aufl.	236S.	Büchmann, G.
1866	3.Aufl.	231S.	Büchmann, G.
1867	4.Aufl.	263S.	Büchmann, G.
1868	5.Aufl.	278S.	Büchmann, G.
1871	6.Aufl.	284S.	Büchmann, G.
1872	7.Aufl.	296S.	Büchmann, G.
1874	8.Aufl.	318S.	Büchmann, G.
1876	9.Aufl.	349S.	Büchmann, G.
1877	10.Aufl.	378S.	Büchmann, G.
1879	11.Aufl.	467S.	Büchmann, G.
1880	12.Aufl.	535S.	Büchmann, G.
1882	13.Aufl.	485S.	Büchmann, G.

ビュヒマン没 (24.02.1884)			
第二期 -----			
1884	14.Aufl.	453S.	Robert-tornow, Walter (1852-1895)
1887	15.Aufl.	523S.	Robert-tornow, W.
1889	16.Aufl.	591S.	Robert-tornow, W.
1892	17.Aufl.	620S.	Robert-tornow, W.
1895	18.Aufl.	699S.	Robert-tornow, W.

1898	19.Aufl.	761S.	Weidling, Konrad (1861-1911)

1900	20.Aufl.	783S.	Ippel, Eduard (1849-1915)
1903	21.Aufl.	823S.	Ippel, E.
1905	22.Aufl.	871S.	Ippel, E.
1907	23.Aufl.	768S.	Ippel, E.

1910	24.Aufl.	739S.	Krieger, Bogdan (1863-1931)
1912	25.Aufl.	688S.	Krieger, B.
1920	26.Aufl.	722S.	Krieger, B.
1925	27.Aufl.	745S.	Krieger, B.
第三期 -----			
1937	28.Aufl.	788S.	Haupt, Gunther (1904-1991) / Rust, Werner (1893-1977)
1942	29.Aufl.	788S.	Haupt, G. / Rust, W.
第四期 -----			
1961	30.Aufl.	989S.	Haupt, G. / Rust, W.

1964	31.Aufl.	990S.	Grunow, Alfred (1893-1980)

1972	32.Aufl.	1039S.	Haupt, G. / Hofmann, Winfried (1931-)

1981	33.Aufl.	543S.	Hofmann, W.
1986	34.Aufl.	543S.	Hofmann, W.
1986	35.Aufl.	543S.	Hofmann, W.
1986	36.Aufl.	543S.	Hofmann, W.
1990	37.Aufl.	543S.	Hofmann, W.
1993	38.Aufl.	543S.	Hofmann, W.
1993	39.Aufl.	543S.	Hofmann, W.
1995	40.Aufl.	614S.	Hofmann, W.
1998	41.Aufl.	614S.	Hofmann, W.
2001	42.Aufl.	650S.	Hofmann, W.
2001	43.Aufl.	650S.	Hofmann, W.

2. 『翼のある言葉』 というタイトルの由来

出版と同時に大きな反響を呼び起こした『翼のある言葉』は、初めのうちはほぼ毎年のペースで増刷された。そして本の売れ行きとともに、タイトルに付けられた「翼のある言葉」という表現自体も人々の間に深く浸透していく。その広がり方は、ドイツをも越えて他国にまで届くほどの勢いであったと言う²⁰⁾。ところで「翼のある言葉」というこの書物のタイトルは、何に

由来するのだろうか。またこの命名について、ビュヒマン自身はどのような説明を行なっているのだろうか。

ADBを見ると、このタイトルに関するビュヒマンの説明は12版と13版に詳しいと書かれている²¹⁾。確かに12版と13版の前書きにも若干の証言はあるが、実はそれほど詳しい内容ではない。むしろタイトルの命名については、初版の前書きのほうがより詳しい証言を得られる。初版と2版の前書きは後の版より分量も多く、内容的にも第3版以降のものとは大きく異なっているのである。

初版の前書きにおけるビュヒマンの記述のうち、特に「翼のある言葉」という表現に関連する部分だけを取り上げると、(1)「翼のある言葉」という呼び方は仮の命名である、(2)「翼のある言葉」は「ことわざ」(Sprichwort)とは異なる、そして(3)「翼のある言葉」の意味は、ホメロス(Homer)の場合とは異なる、という3つにまとめることができる。初版の前書きについての詳細はすでに別の論稿で扱っているが、そのポイントをもう一度ここで整理しておきたい²²⁾。

初版の前書きで、ビュヒマンはこの本の特色について次のように述べている。この本は「文学作品や歴史的人物の口から生じ、一般によく知られるようになった言葉(Aussprüche)をできるだけ多く集め、それらの出所についての情報を記した書物である」²³⁾。さらに続けて、これらの「引用句」(Citat)²⁴⁾はことわざ同様「ドイツ国民の精神的宝庫」であるにもかかわらず、これまでは「まったく見過ごされてきた素材」であったと言う²⁵⁾。

文学作品や歴史上の人物に由来し、出所が明らかでしかも広く人口に膾炙しているこれらの引用句をビュヒマンは„Geflügelte Worte“と名付け、こう説明する。「そもそもこの書で扱われる限定された意味での引用句には、それらの特質を正確に表すための適切な語が欠けている。よって自分は、これらの引用句を仮に„Geflügelte Worte“と呼ぶことにする」²⁶⁾。ビュヒマンのこの証言で重要なのは、„Geflügelte Worte“という呼び名は「仮の」(vorläufig)命名であったという点である。ただの引用句ともことわざとも違うこれら新しい言葉たちを何と呼ぶべきか、ビュヒマン自身にもまだ迷いがあったことが窺える。

また、ことわざとの違いについては次のように述べている。「翼のある言葉」と「ことわざ」は、それをを用いる人間の対象が異なる。「翼のある言葉」は、なるほどことわざと同じような使われ方をするが、ことわざよりももっと狭い範囲の人々が対象となる。すなわち、ことわざが「一般庶民のもの」であるのに対し、「翼のある言葉」はもっぱら「文学的教養人の財産」である²⁷⁾。ことわざとの差異はまた、起源の相違としても表れる。ことわざは「突

然現れ、その出所は不明²⁸⁾であるのに対し、「翼のある言葉」は、すべてその出所が知られている。「元となる作者は誰で、その言葉はいつどこで生まれたのか」²⁹⁾、場合によっては「その言葉が生まれた年や日」の情報さえも明示される³⁰⁾。

では、ホメロスにおける「翼のある言葉」との関係についてはどうか。「翼のある言葉」という表現は、元々はホメロスの『イリアス』(Ilias)と『オデュッセイア』(Odyssee)の中では „ἄπεια πτερόεντα“ という言葉で繰り返し用いられているもので、18世紀のフォス (Johann Heinrich Voß 1751-1826) によるドイツ語訳を通し、ドイツでも当時すでに知られていた。初版の前書きにおいて、ビュヒマンは自分の本のタイトルがホメロスからの「引用」であることを認めた上で、ホメロスにおける「翼のある言葉」が「言葉となった思考のうつろいやすさと動きとを表現している」のに対し、自分の場合には、「他の言葉よりなおいっそううつろいやすく動きのある」、そして「しばしばひとつの言語の枠組を越え、数世紀もの時の隔たりさえ越えて広がっていく言葉」として用いるのだと述べ、その意味の違いを強調する³¹⁾。

前書きにおけるこれらの証言からだけでも十分推測できるように、初期の版はビュヒマンの執筆目的や編集方針を明らかにするだけでなく、„Geflügelte Worte“ という概念を解明するための豊富な材料をも提供してくれる。そのことをより具体的に示すために、次章では初期の版の本文をテキストとして、ビュヒマンの校訂方法を分析したいと思う。

3. ビュヒマンによる校訂作業の実際 —— „Geflügelte Worte“ を例として

„Geflügelte Worte“ という概念は、それ自身が人口に膾炙した言葉として『ビュヒマン』の本文でも取り上げられている。この概念について、ビュヒマンはどのような解説を行なっているだろうか。またその説明は、改訂のたびにどのように変化しているのだろうか。この章では、われわれが進めている編集史的アプローチの一例として、Büchmann自身が校訂した初版から13版のテキストを中心に、„Geflügelte Worte“ という項目に関する記述の変化を追ってみよう。ビュヒマンの校訂作業の実際に近づけるよう、テキストは原文の図版をそのまま使うことにする。

さっそく1864年の初版から見ていこう。„Geflügelte Worte“ に関する項目は、初版では次のように記されている (図2)。

初版における „Geflügelte Worte“ の説明は簡素で、特に注目すべき内容ではない。この本のタイトルがホメロスの『イリアス』と『オデュッセイア』の中で繰り返し用いられている表現からの引用であることを、ホメロスに対

する敬意とともに述べているにすぎない。参考までに、最新版(43版)と比べてみるとその違いは明白であろう(図3参照)。詳細な文献解説によって引用句辞典としての特

色が前面に押し出されている現代版に対し、初版の方は、気軽に楽しめる読み物といった趣である。実際に現物を手に取ってみると、現代版からは想像できないほどコンパクトな書物であったことがわかる³²⁾。なお、初版に続いてすぐ出版された第2版(1865)でも„Geflügelte Worte“に関する解説に変更箇所はなく、初版と同一の本文である(図版は省略)。

Ist es nun nicht billig, daß der Verfasser zuerst des Homer dankbar gedenkt, welcher der Welt den vielfach in der „Iliade“ und der „Odyssee“ wiederkehrenden Ausdruck:

geflügelte Worte,

und damit diesem Büchlein über Citate ein Citat zum passendsten Titel geschenkt hat?

図 2. 1. Aufl (1864)

HOMER verdanken wir den in der »Ilias« 46mal, in der »Odyssee« 58mal vorkommenden Ausdruck

Ἔτερα πτερόεντα
Geflügelte Worte.

Gemeint sind damit wirklich von Göttern und Menschen gesprochene und sozusagen „auf Flügeln“ das Ohr des Hörers erreichende Worte. Erst seit dem Erscheinen des vorliegenden Werkes, also seit 1864, wird der Ausdruck im Sinn von „literarisch belegbaren, in den allgemeinen Sprachschatz des deutschen Volkes übergegangenen, allgemein geläufigen Redensarten“ angewandt. Georg BÜCHMANN ist also als der Urheber der *wissenschaftlichen* Bedeutung des Ausdrucks zu betrachten. Die Bezeichnung drang bald in eine Reihe europäischer Sprachen ein. CARLYLE benutzte in seinem 1838 geschriebenen Essay über Walter Scott (nachgedr. in »Essays on Burns and Scott«. London 1888 u. Oxford 1912, dt. in »Ausgewählte Schriften«. Hrsg. von A. KRETZSCHMAR. Leipzig 1855/56, Bd. 3) den Ausdruck „winged words“ schon im Sinne der „zitierbaren Sentenzen“.

Der Ausdruck „Geflügelte Worte“ wird schon vor der Übersetzung der »Ilias« durch F. L. STOLBERG (Flensburg [u. a.] 1778) und durch Joh. Heinr. VOSS (seit 1777 einzelne Stücke der »Odyssee«, 1781 die ganze »Odyssee«, 1793 die »Ilias«) von Friedr. Gottlieb KLOPSTOCK in seinem »Messias« (1755) gebraucht (VII, 632 u. 842, IX, 637), also vielleicht zum ersten Mal in einer selbständigen, nicht aus einer fremden Sprache übersetzten, deutschen Dichtung. In dem lyrischen Spiel »Die Huldigung der Künste« (1805) benutzt auch SCHILLER die Wendung in dem Vers: „Und mein geflügelt Werkzeug ist das Wort.“ Im büchmannschen Sinn spricht noch 1868 BISMARCK von einem „fliegenden Wort“ (vgl. „Macht geht vor Recht“, S. 453 f.).

Paul LINDENBERG gab in Berlin 1887 »Berliner geflügelte Worte« heraus, und „Geflügelte Theaterworte“ heißt ein Kapitel in Emil PIRCHANS »Bühnenbrevier« (Wien [u. a.] 1938, S. 141 ff.). Auch im »Deutschen Theaterlexikon« (Leipzig 1886–1889) von Ad. OPPENHEIM und Ernst GEJTKE findet sich ein Artikel „Geflügelte Worte der dt. Bühne“. Über ähnliche Redewendungen in der deutschen Literatur und über Bücher, die in anderem als im büchmannschen Sinne den Titel »Ἔτερα πτερόεντα« tragen, vgl. L. TÜRKHEIM: »Auf Büchmanns Spuren. Schnittzel und Späne«. Nürnberg 1913, 5 ff.

図 3. 43. Aufl (2001)

ところが1866年の第3版になると、その内容に特徴的な変化が見られる(図4)。まず第一に、初版と第2版にはなかった„Geflügelte Worte“に対応する原典のギリシャ語が併記されている。第二に、„Geflügelte Worte“という訳語がドイツ語に定着したのはフォスのドイツ語訳によるという指摘もなされている(„fliegende Worte“ではないという注意書きも加わっている)。

第3版の解説でもうひとつ目につくのは、„Geflügelte Worte“という概念の定義と命名に関する部分である。ビュヒマンは、この書の出版以後、「翼のある言葉」という表現がきわめて頻繁に、文学に由来するか出所が確かである普通に使われる引用句に対して用いられていることを指摘した上で、ホメロスとは異なるこの第二の意味の生みの親は他ならぬ自分だと宣言する。本の売れ行きとともに「翼のある言葉」というタイトルが巷に広まったことで、この表現に関する問い合わせも増えたようだ。初版のシンプルな説明にかなり手が加えられ、ビュヒマン的意味での「翼のある言葉」が市民権を得つつある気配が感じられる。

さらにその翌年発行された第4版(図5)では、「きわめて頻繁に」(sehr häufig)という箇所が「一般的に」(allgemein)という語に置き換えられていて、「翼のある言葉」という表現が急速に人々の間へと広まっていく様子が読み取れる。なおたいしたことではないが、第3版の„in allgemein Gebrauch gekommenen“が第4版では„gäng und gäbe gewordenen“に変更されている。これはおそらく文章として„allgemein“が重複するのを避けたためであろう³³⁾。

Auch diesen Abschnitt beginnen wir zunächst mit jenen deutschen Worten, welche aus griechischen Quellen stammen, wie der im **Somer** vielfach zur Bezeichnung menschlicher und göttlicher Rede wiederkehrende Ausdruck:

πτεα πτερόεντα,

dessen Uebersetzung:

Geflügelte Worte (nicht: fliegende Worte)

durch Johann Heinrich Voss bei uns eingebürgert ist. Seit dem Erscheinen dieses Buches wird dieser Ausdruck bereits sehr häufig auf den hier behandelten Stoff, d. h. auf die aus Schriftstellern oder sonst quellenmäßig nachweisbaren und in allgemeinen Gebrauch gekommenen Citate angewendet, so daß der Verfasser, zugleich in Antwort auf direkte Anfragen, sich genöthigt sieht, sich selbst als Urheber dieser zweiten Bedeutung hier zu nennen.

Auch diesen Abschnitt beginnen wir zunächst mit jenen deutschen Worten, welche aus griechischen Quellen stammen, wie der im **Somer** vielfach zur Bezeichnung menschlicher und göttlicher Rede wiederkehrende Ausdruck:

πτεα πτερόεντα,

dessen Uebersetzung:

Geflügelte Worte (nicht: fliegende Worte)

durch Johann Heinrich Voss bei uns eingebürgert ist. Seit dem Erscheinen dieses Buches wird dieser Ausdruck bereits allgemein auf den hier behandelten Stoff, d. h. auf die aus Schriftstellern oder sonst quellenmäßig nachweisbaren und gäng und gäbe gewordenen Citate, angewendet, so daß der Verfasser sich selbst als Urheber dieser zweiten Bedeutung hier nennen darf.

図4. 3.Aufl (1866)

図5. 4.Aufl (1867)

ところでビュヒマンが『翼のある言葉』の編集作業に熱心に取り組み、毎年のように改訂版を出していた時期は、グリム (Jacob und Wilhelm Grimm 1785-1863, 1786-1859) のドイツ語辞典の分冊が次々と出版されていた頃でもあった。ちなみに„GEFLÜGELT“という見出しを含むグリムのBd.4.I-1の

初版が出たのは1878年である³⁴⁾。„Geflügelte Worte“について、グリムではどのように記されているだろうか。図6がその該当箇所であるが、グリムの詳細な記述を読むと、先に示した初期ビュヒマンの版における説明に比べ、格段に専門性が高いという印象を受ける。„Geflügelte Worte“という表現については本文のb)の部分に詳述されているが、ヴァッカーナーゲル(Wilhelm Wackernagel 1806-1868)、クロップシュトック(Friedrich Gottlieb Klopstock 1724-1803)、フォス、ゲーテ(Johann Wolfgang von Goethe 1749-1832)等の原典にも言及した学術的内容である。

GEFLÜGELT, mit flügeln versehen, geflügelt alatus DASYP. 6^a, MAALER 162^a. vgl. geflügt, gefiedert.

1) geflügelt an füszen, alpes. STIELER 511; ich will laufen als wenn meine beine geflügelt wären. CAUSEM. 58; geflügelter drache u. ä.; gott Amor, die göttin Victoria u. ä.:

siehe, da finden sie sich, es führet sie Amor zusammen, und dem geflügelten gott folgt der geflügelte sieg. SCHILLER XI, 196 (die geschlechter).

von gewissen samenkörnern, die wie mit kleinen flücheln versehen sind, dass sie der wind fliegend ins weite trägt (s. flügel 11): Deutschland, in welches Rousseau geflügelte samenkörner aus Frankreich verweht und eingeaekert wurden. J. PAUL. Levana § 5: der von der poesie geflügelte same der wahrheit. Hesp. 2, 79 (jetzt lieber beflügelt), zugleich zum folgenden.

2) bildlich, wie mit flügeln versehen; vgl. unter flügeln 1.

a) von der menschlichen seele, gedanken, phantasie (vergl. gefiedert 2, a und sp. 1960): flügel her! rufte die fromme Monica, da ihr sohn (Augustinus) vom ewigen leben predigte. aber was thut die kinder dieser welt? ach die sind schlecht geflügelt! in der welt suchen sie ihre freud, der himmel stinkt sie an. OTHO 558, haben schlechte oder keine flügel; gedanken sind geflügelt, aber fast als der hühner art, sie fliegen nicht in die höhe. LEHMAN flor. 1, 262;

die geflügelten gedanken
fliehn des wahnes enge schranken. Uz 1, 101 (163);

kinder mit geflügelter phantasie. J. PAUL uns. toge 1, 187; alles das. . . war dem geflügelten jüngling ein räthsel. 1, 135, von begeisterung.

b) worte, sprüche als vögel, gefiedert und fliegend gedacht, auch bei uns schon in aller zeit (vgl. u. fliegen 7, mehr bei WACKERN. Έξεα πτερο. s. 47 fg.), z. b.:

dó vlygen distu mare von lande ze lant. Nib. 1362, 2. 1530, 1. seit dem 18. jahrh. aber geflügelte worte nach Homers Έξεα πτεροβρα, mit verschiedener auffassung, nicht eben immer anschaulich und bestimmt, mehr als griechisches schönplästerchen auf dem stiel (gefiederte wäre besser gewesen, vgl. WACKERNAGEL a. a. o. s. 5 ff.):

den feurigen sündler umgaben
seine vertrauten, pharisäer. geflügelte worte
sprach er zu ihnen. KLOPST. Mess. 1, 632;
wand' er zu Abdiel sich, und sprach die geflügelten worte.
9, 637;

da er mit feurigeflügelten worten zu reden vermochte,
19, 195,

wie mit feurigen oder feuerflügeln versehen;
redete freundlich sie an und sprach die geflügelten worte.
Voss Od. 1, 122 u. o.;

da versetzte sogleich der sohn mit geflügelten worten.
GÖTTE 40, 281 (Hern. u. Dor. 5).

später auch in prosa: an die schnell gesammelten untergeordneten vertheilt er mit geflügelten worten seine befehle. GÖTTE 38, 261 (über Manzoni's conte di Carmo), kurze rasche commandoworte. jetzt nennt man irgend ein neues treffendes kraft- oder witzwort, einen lieblingspruch des tages, ein glückliches citat u. ä. ein geflügeltes wort, ohne eben noch an flügel oder Homer zu denken (auch schon ironisch ein albernes). anders, noch im eigenlichen sinne:

mein (der poesie) unermesslich reich ist der gedanke
und mein geflügelt werkzeug ist das wort.
SCHILLER XV 1, 1 (huld. d. k.);

indem das geflügelte wort und die schrift sie (die neuen ideen) allerwärts umtragen. GÖRRES Eur. u. die rev. 254.

図 6. GrimmBd.4.1-1 (1878)

Vieles verdanken wir Homer, wie den vielfach wiederkehrenden Ausdruck:

Έξεα πτεροβρα,

dessen Uebersetzung:

Geflügelte Worte (nicht: fliegende Worte)

durch Johann Heinrich Voss bei uns eingebürgert ist, welcher die Odyssee 1781 herausgab, einzelne Stücke derselben jedoch schon seit 1777 veröffentlicht hatte und die Ilias 1793 folgen ließ. Seit dem Erscheinen meines Buches, also seit 1864, wird dieser Ausdruck bereits allgemein auf den hier behandelten Stoff, d. h. auf die aus Schriftstellern oder sonst quellennäßig nachweisbaren und gäng und gäbe gewordenen Citate angewendeten, so dass der Verfasser des vorliegenden Werkes sich selbst als Urheber dieser zweiten Bedeutung hier nennen darf.

Έξεα πτεροβρα ist auch der Titel einer von Wilhelm Wackernagel zur vierten Säkularfeier der Universität Basel (Basel, Schweighauser'sche Universitäts-Buchhandlung, 1860) verfassten Jubelschrift, in welcher der Verfasser in der Redensart Έξεα πτεροβρα neben der stylistischen Bedeutung auch eine mythologische und die mythische Wechselbeziehung der Begriffe „Wort“ und „Vogel“ darzulegen sucht.

„Έξεα πτεροβρα“ oder „Diversions of Purley“ (Unterhaltungen in Purley, einem Landsitz) ist ferner der Titel eines 1768 zu London erschienenen „Gespräche über die Sprache“ enthaltenden Werkes Horne Tooke's.

Der Ausdruck „Geflügelte Worte“ wurde bereits von Klopstock 1755 angewendet im „Messias“, Gesang 7, V. 632 und 842, sowie Gesang 9, V. 637. Im Gesang 7, V. 191 und 703 gebraucht er „fliegende Worte“.

Wieland machte von dem Wort im „Cyrus“ Gebrauch, welcher 1759 erschien.

Matthias Claudius in „Sämmtliche Werke des Wandsbecker Bothen“, Teil 3 (1778) sagt in der Kritik eines Buches „An Prediger. Funfzehn Provinzialblätter. Leipzig 1774“: (Es erscheint hier ein Prediger, der die Würde seines Berufs kennt, und tut seinen Mund über seinen Stand auf, nicht zu Komplimenten und Federlesen, sondern zu geflügelten Sprüchen . . .

In „Chr. Fr. D. Schubart's Leben in seinen Briefen. Gesammelt, bearbeitet und herausgegeben von David Friedr. Strauß“ (Berlin, Alex. Duncker, 1849) beginnt Brief 103, welchen Schubart an seinen Bruder Stadtschreiber, Ulm, den 13. April 1775, richtet: „Nur drei geflügelte Worte, Liebster Bruder!“ u. s. w.

Am 11. April 1874 hielt der Wiener Männergesang-Verein eine Liedertafel, auf der ein Walzer für zwei Soliquartette „Geflügelte Worte“ von Josef v. Koch mit Beifall aufgenommen wurde.

図 7. 11. Aufl (1879)

1878 年に出たグリムの記述を知った後に、その翌年（1879 年）刊行されたビュヒマン第 11 版（図 7）を見ると、グリムの詳細な記述がビュヒマンにヒントを与えたのではないかと思ってしまう。すぐ目につくのは、たとえば „ἔπεα πτερόεντα“ という概念における「言葉」と「鳥」との神話学的関係を論じた、ヴァッカーナーゲルの論文³⁵⁾についての言及である。グリムの学術的権威を思えば、ビュヒマンがグリムを援用する可能性は十分ありうるからである。私も最初はその可能性が高いだろうと考えていた。

ところがグリムのこの記述に先立つ 1871 年のビュヒマン第 6 版を手に入れて初めて、そうではないことがわかった。ビュヒマンは、第 6 版の段階ですでにヴァッカーナーゲルの論文に言及しており、その原文を引用しているのである（図 8）。

Auch diesen Abschnitt beginnen wir zunächst mit jenen deutschen Worten, welche aus griechischen Quellen stammen, wie der im **Somer** vielfach wiederkehrende Ausdruck:

ἔπεα πτερόεντα,

dessen Uebersetzung:

Geflügelte Worte (nicht: fliegende Worte)

durch Johann Heinrich Voss bei uns eingebürgert ist. Seit dem Erscheinen dieses Buches, also seit 1864, wird dieser Ausdruck bereits allgemein auf den hier behandelten Stoff, d. h. auf die aus Schriftstellern oder sonst quellenmäßig nachweisbaren und gäng und gäbe gewordenen Citate, angewendet, so daß der Verfasser des vorliegenden Werkes sich selbst als Urheber dieser zweiten Bedeutung hier nennen darf.

„ἔπεα πτερόεντα ist auch der Titel einer von Wilhelm Wadernagel zur vierten Säcularfeier der Universität Basel (Basel, Schweighauser'sche Universitäts-Buchhandlung, 1860) verfassten Jubelschrift, in welcher der Verfasser in seiner sinnig poetischen Weise mit tiefer Gelehrsamkeit in der Nedenkart ἔπεα πτερόεντα neben der stilkunstlichen Bedeutung auch eine mythologische und die mythische Wechselbeziehung der Begriffe Wort und Vogel darzulegen sucht. „Die Vögel werden danach aufgefaßt als Worte in Vogelgestalt, besiederte Worte, und ἔπεα πτερόεντα sind die Worte, die, sobald sie aus der Seele hervor auf die Zunge treten und der Wand der Lähne entfliehen, zu Vögeln werden, zu Vögeln, wie jene, die Götter und Menschen als Boten senden, zu Vögeln, die nun davongeflogen sind, die man nicht zurückrufen, nicht wieder einfangen kann, die vielleicht fliegen, wohin sie nicht sollten, und wohin sie sollten, dahin nicht gelangen. . . . An Schnelligkeit wird dabei weiter nicht gedacht.“ Unt weil die Uebersetzung „gefügelte Worte“ eben auf der Auffassung der Schnelligkeit des Sprechens beruht und diese Auffassung befestigen hilft, so schlägt Wadernagel vor, „besiederte Worte“ zu übersetzen.

„ἔπεα πτερόεντα“ oder „Diversion of Purlley“ (Unterhaltungen in Purlley, einem Landstige) ist ferner der Titel eines 1786 zu London erschienenen, Gespräche über die Sprache enthaltenden Werkes John Horace Tooke's.

図 8. 6.Aufl (1871)

むろん次のような反論もありえよう。周知のように、グリムの辞典は全巻完結までに 100 年以上の年数を費やしている。有名な G の項目だけでなんと 80 年である。„GEFLÜGELT“ が含まれている第 4 巻 I-1 の 1 冊だけ見ても、1863 年から 1878 年までの 15 年かかっている。グリムの分冊の方がビュヒマンの第 6 版より先に出ていたという可能性はないかと。

その可能性についても調べてみたが、それはおそろくないだろう。グリム第 4 巻で „GEFLÜGELT“ の項目を執筆したのはヒルデブランド (Rudolf Hildebrand 1824-1894) だが、彼が編集した第 10 分冊が世に出たのは 1878 年になってからのことである（図 9 参照）。つまりヴァッカーナーゲルの論文については、ビュヒマンの方がグリムより 7 年も前に言及しているのである。

さらにもう一点、ヴァッカーナーゲル、ビュヒマン、グリムの1次資料を照合して初めて気づいたことだが、ヴァッカーナーゲルに関するヒルデブラントの記述には、誤植または勘違いの可能性がある³⁶⁾。一方ビュヒマンの引用は正確であり、彼が実際にヴァッカーナーゲルを読んでいたことは間違いない。些細な部分かもしれないが、これらの事実は『ビュヒマン』の学術的価値を見直すひとつの大きな根拠になると考えてよいのではなかろうか³⁷⁾。

erscheinungs-jahr	lieferung	wortgrenzen	spalten	bearbeiter der lieferung
1878				
1863	1	forschel — fromm	1— 240	J. Grimm
1866	2	fromm — ful	241— 480	J. Grimm (sp. 241—269) u. K. Weigand (sp. 269—480)
1869	3	ful — fürders	481— 720	K. Weigand
1871	4	fürdersaal — fuschen	721— 960	K. Weigand
1872	5	fuscher — galmei	961—1200	K. Weigand (fuscher — fysten) u. R. Hildebrand (g — galmei)
1874	6	galmei — garten	1201—1392	R. Hildebrand
1876	7	garten — gauner	1393—1584	R. Hildebrand
1876	8	gauner — gebirge	1585—1776	R. Hildebrand
1877	9	gebirge — gedanke	1777—1968	R. Hildebrand
1878	10	gedanke — gefolgsman	1969—2152	R. Hildebrand

図9. Grimm Bd.33. Quellenverzeichnis (1971) より

本章の締めくくり
に、第13版(1882)
の記述を見てみよう
(図10)。第13版は
ビュヒマン自身が自
ら校訂した最後の版
であるが、それ以前
の版に見られた詳細
な記述は大きく削除
され、「翼のある言葉」
という概念が、すでに

ゲーデケ(Karl Goedeke 1814-1887)、ジュネ(Rudolph Genée 1824-1914)、グリム等の学術書の中でビュヒマン的意味で使われていることが記されているのみである。また、「ἔπεα πτερόεντα」という表現が『オデュッセイア』では58回、『イリアス』では46回用いられていると記されたのも、第13版が最初である³⁸⁾。

このように、初版の前書きにおいてはあくまでも暫定的な命名でしかなかった「Geflügelte Worte」という表現が、ビュヒマンの地道な改訂作業の中でより一層明確な概念へと変化していくそのプロセスが、本論の限られた考察範囲からでも読み取ることができよう。

Homer verdanken wir den Ausdruck:

ἔπεα πτερόεντα,
geflügelte Worte,

welcher 58 mal in der Odyssee, 46 mal in der Iliade vorkommt. Er wird seit dem Erscheinen meines Buches, also seit 1864, allgemein auf den in ihm behandelten Stoff angewendet, so von hervorragenden Schriftstellern, wie Karl Goedeke (s. S. 144), Rudolph Genée „Shakespeare. Sein Leben und seine Werke“, S. 113. Hildburghausen 1872.

In Grimm's Wörterbuch heißt es unter „geflügelt“: „jetzt nennt man ein neues treffendes Kraft- oder Witzwort, einen Lieblingsspruch des Tages, ein glückliches Citat u. a. ein geflügeltes Wort, ohne eben noch an Flügel oder Homer zu denken, (auch schon ironisch) ein albernes.“

図10. 13. Aufl (1882)

おわりに

ビュヒマンがたえず志向していたのは、単に収録する引用句を増やすことではなく、『翼のある言葉』を学術書として質的に高めることであったと言えよう。初期の版の前書きや彼の校訂作業を具体的に見てみると、この本をより学術的な方向に成長させたいという彼の意図が十分見て取れる。彼が行なったひとつひとつの改訂作業の細部にこそ、„Geflügelte Worte“ という概念を正確に定義するための糸口が隠されている。ビュヒマンの校訂史を地道に辿り直すことは、ビュヒマンの仕事を再評価するためにも意味のある作業であると思われる。本論の分析は、そのためのほんの出発点に過ぎないが、文献学的、編集史的視点からのアプローチは、ビュヒマン研究にとって欠かすことのできない重要な前提だということだけは確かである。

注釈

- 1) Büchmann, Georg: Geflügelte Worte. Der Citatenschatz des Deutschen Volks. Berlin, 1864. このテキストに言及する場合、本論では基本的に『翼のある言葉』と表記するが、文脈によって『ビュヒマン』とした箇所もある。また、原文については版と出版年のみ記す。
- 2) Büchmann, Georg: Geflügelte Worte. Der klassische Zitatenschatz. Neubearbeitet und aktualisiert von Winfried Hofmann. 43.Aufl. Frankfurt/M, Berlin 2001.
- 3) Ebd., S.159.
- 4) シラー (Friedrich von Schiller 1759-1805) の原文は、„Spät kommt ihr, doch ihr kommt! Der weite Weg, Graf Isolan, entschuldigt euer Säumen. (Die Piccolomini, I, 1)
- 5) 佐伯 啓「ゲオルク・ビュヒマンの『翼のある言葉』—— 文献学的研究序説 ——」『人間情報学研究』第10巻 2005, P.30 参照。
- 6) Allgemeine Deutsche Biographie (ADB), Bd. 47.(Nachträge bis 1899.) Hrsg. durch die historische Commission bei der Königl. Akademie der Wissenschaften. Leipzig 1903, S.322-326.
- 7) Neue Deutsche Biographie (NDB), Bd.2. Hrsg. von der historischen Kommission bei der bayerischen Akademie der Wissenschaften. Berlin 1955, S.719f.
- 8) Frühwald, Wolfgang: Büchmann und die Folgen. Zur sozialen Funktion des Bildungszitates in der deutschen Literatur des 19. Jahrhunderts. In: Bildungsbürgertum im 19. Jahrhundert. Teil II. Bildungsgüter und Bildungswissen.

- Hrsg. von Reinhart Koselleck. Stuttgart 1990, S.197-219.
- 9) Hess, Günter: Vom Flug der Worte und Bilder. Büchmanns Citatenschatz als Medium deutscher Bildungs- und Ideologiegeschichte im 19. und 20. Jahrhundert. In: Die Literatur und die Wissenschaften 1770 - 1930. Fs. Walter Müller-Seidel. Hrsg. v. Karl Richter u.a. Stuttgart 1997, S.233-294.
 - 10) ヘス本人の談話によれば、プロジェクトが中断されたのは健康上の理由とのことである。
 - 11) 内容的にはそれぞれ 35.Aufl. および 43.Aufl. とまったく同一である。
 - 12) ADB, S.324.
 - 13) Ebd., S.323.
 - 14) Loc. cit.
 - 15) Dreihundert Jahre. Die Haude & Spenersche Buchhandlung in Berlin 1614 bis 1914. Berlin 1914, S.59f.
 - 16) Büchmann, 1.Aufl., S.9. 他。ビュヒマンは改訂のたびに、本の前書きにおいて同様の呼びかけを行なっている。
 - 17) Büchmann, Georg: Sechshundert Correspondenten. In: Die Gegenwart Nr.39. 1879, S.198-200.
 - 18) 33 版以降はレイアウトが 2 列に変更されたため、ページ数としては半分になっている。
 - 19) 各版の編集者については別の論稿で紹介する予定なので本論では詳細は省略するが、後の編集者のうち、ハオプト (Gunther Haupt 1904-1991) とグルノウ (Alfred Grunow 1893-1980) の生没年の調査はきわめて難儀であったということだけ記しておきたい。牧師であったハオプトについては、ナチスとの関わりゆえに公的データが闇に葬られたらしい (本論では、彼の墓石に残された記載から正確な生没年が確定できた)。„Führende Worte“ の編集者としても知られるグルノウについては、生没年が公表されていない理由はわからない。彼の生没年は、ベルリンに住んでいたとの記述を手がかりに、ベルリンの役所に照会することでようやく判明した。なお、これら二人のデータ調査は、同僚のフリーダー・ゾンダーマンの助力によってはじめて可能となった。この場を借りて感謝したい。
 - 20) ADB, S.323.
 - 21) Ebd., S.324.
 - 22) ここの部分は注 5) の拙論と一部重なるが、本論の考察にとっても重要な箇所なので、読者の便宜を考慮して重複を厭わず論ずることにする。
 - 23) Büchmann, 1.Aufl., S.2.

- 24) ちなみに『ビュヒマン』において Citat の綴りが Zitat と表記されるようになったのは、1905 年の 22.Aufl. 以降である。
- 25) Büchmann, 1.Aufl., S.3.
- 26) Ebd., S.6.
- 27) Ebd., S.4.
- 28) Loc.cit.
- 29) Loc.cit.
- 30) Loc.cit.
- 31) Ebd., S.6.
- 32) 活字がドイツ文字 (Fraktur) から普通の書体に改版されたのは、1877 年発行の 10.Aufl. からである。
- 33) なお翌年出た第 5 版 (1868) の本文も、„Geflügelte Worte“ については第 4 版と異なる部分はない。
- 34) Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm. Bd.4-I,1. FORSCHE GEFOLGSMANN. Leipzig 1878.
- 35) Wackernagel, Wilhelm: ΕΠΕΑ ΠΤΕΡΟΕΝΤΑ. Ein Beitrag zur vergleichenden Mythologie. Basel 1860.
- 36) Grimm Bd.4-I,1. の記述では、ホメロスの „ἔπεα πτερόεντα“ は „geflügelte Worte“ ではなく „gefiederte Worte“ と訳したほうがよかっただろうとされており、その根拠としてヴァッカーナーゲルを参照と書かれている (Sp.2148.)。だがヴァッカーナーゲルの論文での表記は „befiederte Worte“ であり、ビュヒマンの引用の方がより正確である。Wackernagel, S.45. 参照。
- 37) 本論では、第 7 版から 12 版における記述内容については紙数の関係で省略するが、„Geflügelte Worte“ という概念に関するより詳細な分析はわれわれの編集史研究の中核部分でもあるので、書評や手紙をはじめとする二次資料の精査も含めて、あらためて論じる予定である。
- 38) ホメロスの『イリアス』と『オデュッセイア』にこの言葉が出てくる回数 (それぞれ 46 回と 58 回) は、第 13 版における記述が今日の版でもそのまま引き継がれている (図 3. 参照)。この数字は、ビュヒマン没後に発刊された『翼のある言葉』すべての版において何ら疑われることなく継承されている。しかし念のため調査してみたところ、ホメロスのギリシャ語のテキストでもフォスのドイツ語訳 — 初版は „Odyssee“ が 1781 年、„Ilias“ が 1793 年 — でも、これらの数字は違っていた (ビュヒマンが参照した可能性のある版を複数調査した)。ビュヒマンが挙げている 46 回と 58 回という数字は何を根拠としていたものか、またその数

が本当に正しいのかどうかは調査中なので、まだ確かなことは言えない(第13版で『オデュッセイア』の方を先に挙げているところから推測すると、おそらくビュヒマンはフォス訳のドイツ語版を参照したと思われる。ただ、たとえばフォス訳の初版では、私の数え間違いでなければ „Geflügelte Worte“ は „Ilias“ で60回、 „Odyssee“ で63回出てくる)。いずれにしても、少なくとも『ビュヒマン』最新版の編集者は、現在定本とされているホメロスのテキストに沿って数字を修正すべきであろう。ただ、46回と58回という記述がビュヒマンの「権威」の証明であるとするなら、それはそれで興味深い。

画像で用いたテキスト

- ☒ 1. Apitz, C.E.P./Kunkel, M.: Karl Bd.1. Der Spätlesereiter. Walluf 1988.
- ☒ 2. Büchmann, Georg: Geflügelte Worte. Der Citatenschatz des Deutschen Volks. Berlin, 1864.
- ☒ 3. Büchmann, Georg: Geflügelte Worte. Der klassische Zitatenschatz. Neubearbeitet und aktualisiert von Winfried Hofmann. 43.Aufl. Frankfurt/M, Berlin 2001.
- ☒ 4. Büchmann, Georg: Geflügelte Worte. Der Citatenschatz des Deutschen Volks. Dritte umgearbeitete und vermehrte Auflage. Berlin, 1866.
- ☒ 5. Büchmann, Georg: Geflügelte Worte. Der Citatenschatz des Deutschen Volks. Vierte umgearbeitete und vermehrte Auflage. Berlin, 1867.
- ☒ 6. Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm. Bd.4-1,1. FORSCHEL-GEFOLGSMANN. Leipzig 1878, SP.2148.
- ☒ 7. Büchmann, Georg: Geflügelte Worte. Der Citatenschatz des Deutschen Volks. Elfte umgearbeitete und vermehrte Auflage. Berlin, 1879.
- ☒ 8. Büchmann, Georg: Geflügelte Worte. Der Citatenschatz des Deutschen Volks. Sechste verbesserte und vermehrte Auflage. Berlin, 1871.
- ☒ 9. Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm. Bd.33. Quellenverzeichnis. München 1984 (1971).
- ☒ 10. Büchmann, Georg: Geflügelte Worte. Der Citatenschatz des Deutschen Volkes. Dreizehnte vermehrte und umgearbeitete Auflage. Berlin, 1882.

Editionsgeschichte von Georg Büchmanns „Geflügelten Worten“

Kei Saeki

„Geflügelte Worte — Der Citatenschatz des Deutschen Volks“ von Georg Büchmann (1822-1884) wurde erstmals 1864 in Berlin veröffentlicht. Das 220seitige, bescheidene Buch umfasste nicht nur deutsche, sondern auch englische, französische, italienische, griechische, lateinische, biblische und historische Zitate. Zitate, die „von nachweisbaren Verfassern ausgegangen, allgemein bekannt geworden sind und allgemein wie Sprichwörter angewendet werden“, nannte Büchmann anfänglich „Geflügelte Worte“.

Kurz nach dem Erscheinen bekam das Buch schon einen ungeahnten Erfolg, wurde in mehreren Auflagen zu einem unentbehrlichen Nachschlagewerk und Hausbuch. Nach Büchmanns Tod (1884) wurde die Redaktionsarbeit an dem Buch seinen Nachfolgern wie Walter Robert-tornow, Konrad Weidling, Eduard Ippel, Bogdan Krieger, Gunther Haupt, Werner Rust, Alfred Grunow und Winfried Hofmann überlassen. „Der Büchmann“ gilt damit auch heute noch als das bekannteste Zitätenlexikon in Deutschland.

Trotz des großen Beifalls und der andauernden Popularität beim Publikum hat man jedoch bisher kaum dieses Werk oder Büchmanns Tätigkeit eingehend untersucht. Das in einer Festschrift genannte Forschungsprojekt von Günter Hess, Büchmanns Zitatenschatz als historische und literarische Quelle auf der Grundlage von 25 Auflagen-Varianten zu untersuchen, sollte sich zwar in die mit unserem Interesse gemeinsame Richtung entwickeln, wurde jedoch inzwischen abgebrochen und nicht weitergeführt. Außer dieser Vorarbeit von Hess (1997) fallen sonst keine ausführlichen Forschungen über Büchmann auf, während gründliche Arbeiten etwa über Daniel Sanders oder Karl Friedrich Wilhelm Wander, die auch in der Phraseologie im 19. Jahrhundert eine große Rolle spielten, herausgekommen sind.

Im Zusammenhang mit meiner Zitätenforschung habe ich seit fast 10 Jahren Originalauflagen der „Geflügelten Worte“ Büchmanns als Literaturbasis systematisch gesammelt. Jetzt besitze ich - bis auf zwei unwichtige Auflagen (34.Aufl., 42.Aufl.), die im Wortlaut mit anderen (je 35.Aufl. und 43.Aufl.) völlig identisch sind - von der ersten (1864) bis zur neuesten 43.Auflage 2001 insgesamt 41 Ausgaben des sogenannten „großen Büchmanns“. Bei Gelegenheit meines Forschungsaufenthaltes

in Deutschland 2001-2002 habe ich dann noch weitere wichtige Quellen, Briefe von und an Büchmann sowie Rezensionen über frühe Auflagen in Literaturzeitschriften und Zeitungen, die vorwiegend zu Büchmanns Lebzeiten veröffentlicht wurden, untersucht und gesammelt.

Der vorliegende Beitrag ist ein Teilergebnis von Untersuchungen im Rahmen meines Forschungsvorhabens, das sich mit Büchmanns „Geflügelten Worten“ aus editionsgeschichtlicher Sicht befasst. Hier beschränke ich mich hauptsächlich auf drei Aspekte:

1. Entstehung des Buches mit Überblick der Editionsgeschichte,
2. die Benennung des Buchtitels,
3. Büchmanns Revisionen des Begriffs „Geflügelte Worte“ in den verschiedenen Auflagen.

Der direkte Anlaß der ersten Publikation war ein Vortrag über „landläufige Zitate“, den Büchmann 1864 im Saale des Berliner Königlichen Schauspielhauses hielt. Friedrich Weidling, der Besitzer der Haude und Spenerschen Buchhandlung, war anwesend und überredete Büchmann dazu, den Vortrag in erweiterter Form als Buch umzuarbeiten und in seinem Verlag zu veröffentlichen. Der Erfolg des Buches war schon von Anfang an ein ganz außerordentlicher. Ein Grund dafür könnte darin liegen, dass Büchmann in der Einleitung der frühen Auflagen die Leser um Zusätze und Berichtigungen bat. Sein Appell rief ein so großes Echo hervor, dass er seinen Lesern in dem Aufsatz „Sechshundert Correspondenten“ 1879 seinen Dank für ihre Mitarbeit aussprach.

Der Buchtitel „Geflügelte Worte“ war - nach Büchmann - eine ganz provisorische Benennung. Zwar wußte er schon, dass der Ausdruck bei Homer mehrmals vorkommt, wollte ihm jedoch eine andere Bedeutung geben. In jeder Auflage versuchte er, den Begriff richtiger zu definieren. Deshalb war es für ihn besonders wichtig, „Geflügeltes Wort“ und „Sprichwort“ genauer zu differenzieren.

Durch die Analyse der Änderungen des Wortlautes und des Umfangs in jeder neuen Auflage kann man Aufschlüsse über die Entwicklung des Werkes erhalten. Daraus ergibt sich, dass Büchmann seine Zitatensammlung nicht nur quantitativ, sondern auch qualitativ, also wissenschaftlich bereichern wollte. Um Büchmanns Arbeitsweise bei der Revidierung herauszuarbeiten, muss die philologische und editionsgeschichtliche Sicht zweifellos vorab geklärt werden.

